

特別活動における学級会のあり方について — 小学校学級活動を例に —

長沼 豊

1. 主題設定の理由

特別活動を熱心実践している学校や研究会から招聘されて、研究助言者として各地の小・中学校を訪問する機会が多い。個別の学校の校内研究会もあれば、自治体の教育研究会の特別活動部会もある。研究会の内容は、おおむね学級活動の授業視察、授業検討会（研究協議会）、講評または講演会である。

学級活動は学習指導要領に定められた内容（１）（２）（３）のいずれかであるが、授業視察では内容（１）の学級会の実践であることがほとんどである（小学校は内容（３）が新設されたこともあり近年それも多くなってはいるが）。

学級会の話し合い活動の質は、教員の力量や熱量（意識、意欲）により差が見られるが、特別活動を熱心に取り組んでいる学校（や教員）の実践は、充実したものが多い。そして、それらの実践のほぼ全てが通称「緑本」（国立教育政策研究所が作成した教員向けの指導書^①で、表紙が薄緑色であることから筆者はこう呼ぶ、以下同じ）に示されたモデルを用いている（図 1 および図 2）。緑本は、初任や経験年数の少ない教員でも特別活動の指導助言ができるように、わかりやすく丁寧な説明がなされており、一つのモデルと言える。もちろん一つのモデルであって、他の方法を用いても何ら問題はない。このことは執筆責任者である杉田洋、安部恭子（文部科学省小学校特別活動の前・現の教科調査官）両氏ともに認めている。

では、緑本で示された学級会のモデル（以下「緑本モデル」）が学級会の唯一の方法でないとすれば、どのような方法がよいのだろうか。学級会のあり方を探ったり、新しい方法を提案したりすることは意義があると考え、主題を設定した。本稿では、まず緑本モデルで行う話し合い活動の課題を抽出する。そして、その課題を解決する一つの方策例として代議制の導入を提案する。

2017（平成 29）年告示の小学校学習指導要領においては、児童による合意形成と意思決定が重要であるとされている。合意形成を行うための知識・技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等を、学級会の実践を通して身につけさせることが求められているのである。このような実践を行う上で本稿の知見が役立つとすれば、研究上および実践上の意義を有するものとなるだろう。

^① 文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター「楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動（小学校編）」文溪堂、2014年、および同「みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる特別活動（小学校編）」文溪堂、2019年。



図1 緑本モデルにおける学級活動の進め方の例示① (2014年版、pp. 6-7)



図2 緑本モデルにおける学級活動の進め方の例示② (2019年版、pp. 8-9)

2. 緑本モデルによる学級会の課題

(1) 学級会の多様な方法

先行研究として、日本特別活動学会の共同研究（通称「地域研」）では、さまざまなモデルを分析している。当該研究は最終報告が済んでいないため、レビューは公開されているものにとどめるが、緑本形式、原案形式、複数原案形式、PCM形式を挙げて分析している⁽²⁾。原案方式とは横浜市を中心として展開されてきたスタイルで、事前に策定された企画書に基づいて話し合う方式、複数原案方式は新潟市を中心として展開されてきたスタイルで、A or B方式、論点整理型とも呼ばれる。PCM形式は多摩市のある小学校で行われているPositive Consensus Meetingで、ポジティブな点を共有化していく方式である。これらの詳細については触れないが、緑本モデルの方法にこだわらない方法が各地にはあるということ間違いない。むしろ、各地で多様な方法が行われてきていて、緑本は後から出来たとも言えるのである。つまり緑本モデルは学級会の多様な方法の一つでしかなく、無理にその通りに実践する必要はない。このことを前提として論を進めたい。

(2) 課題検討のための視点

本稿では、緑本モデルの課題検討を行う上で3つの視点を設定した。

第一に、児童が発言しやすいか、合意形成しやすいか、事前に過度な時間を要しないかなど、児童の視点で考えることである。

第二に、指導しやすい方法かどうか、最近の働き方改革の動向を加味すると事前指導に時間がかかり過ぎないかどうかなど、教員の視点で考えることである。

第三に、合意形成を行う学級会は、民主主義の理念・内容・方法等を体験・体感・体得する場として機能させる必要があり、シティズンシップ教育の視点で考えることである。

最近、宿題や定期考査をなくす（千代田区立麴町中学校）、校則をなくす（世田谷区立桜丘中学校）、学年の枠を外す（イエナ・プラン）など、種々の学校改革がメディアで取り上げられているが、そのいずれも今までの学校の当たり前をそう思わず、新しい視点で改革を行っているのが特徴である。学級会も新しい視点で改革することがあってもよいだろう。

3. 緑本モデルによる学級会の課題

まず、緑本モデルの学級会の課題を挙げる。

日本特別活動学会の共同研究では、緑本の特徴として以下を挙げている。

- ①学級会に至るまでの準備期間が短い
- ②基本的には5W1Hに基づいて企画を完成させることが目的（What、How、Who）
- ③Whatを柱1、Howを柱2、Whoを柱3と呼ぶ（柱=話し合うこと）
- ④企画の成立後（企画書の完成）は計画委員会もしくは担当者（係）が準備を進める
- ⑤45分間の時間を考えると話し合う内容が多い（この点で様々な工夫が必要となる）

このうち課題として挙げているのは⑤である。この点を含めて、緑本モデルの方法の課題を挙げる。

(1) 時間的な難しさ

⁽²⁾ 日本特別活動学会第28回大会課題研究（第2分科会）資料より。

上記⑤の指摘はその通りで、筆者も 3 つの柱を全て話し合った実践は一度も見たことがない。2 つでもかなりタイトな時間であり、見たことはあるがかなり強引に決めていて合意形成と言えるのか疑問であった。ちなみに 1 つでも終わらないケースも多々見ている。研究授業でもそのような状態であるから、一般の授業では果たしてどうなのか。そもそも、このモデルの方式は小学生に適しているのだろうか。本研究に着手した動機はこの点がとても強い。

すなわち

- ・ 3 つの柱を議論して決定するのは時間的に無理である
- ・ 正味 30 分程度で意見を集約するのは小学生にはかなり難しいという課題がある。

(2) 全員参加の難しさ

筆者が視察した授業では、そのほとんどで同じ児童が何回も発言している。リーダーシップを発揮していて良いという評価もできるが、一方全員で合意形成をしていると言えるのかという疑問も生じる。もちろん全員発言している学級会に出会うこともあるが、それが目的となり満足していないだろうか。本当に全員で合意形成できているのだろうか。

つまり

- ・ 全員で協議することにそもそも無理がある
- ・ 全員発言することが目的となることもある
- ・ 本当に全員で合意形成が出来ているか？（全員が納得しているか？）

という課題がある。

この点については、シティズンシップ教育の視点からさらに述べておきたい。

筆者は、学校はできる限り社会の縮図として機能させ、将来社会で活躍する人材を育てることが学校の一つの使命だと考えている。では社会で、40 人全員で合意形成する場面はあるだろうか。むしろほとんどないのではないか。仕事の内容、業界・業種によっても異なるだろうが、一般的には数名のグループで合意形成するのが普通ではないか。だとすれば、社会に出てやらないことをやっても良いのだろうか。むしろ少人数のグループで議論したり、合意形成したりする方が、より社会に出て有効なスキルを身につけるのではないか。45 分で 40 人、一人の発言時間はわずかである。聞いている時間の方が長い。一部の児童がリードする学級会で、付度することを学んではいけないだろうか。自分ごととして主体的に関与するためには、発言する機会を増やしていく必要があるのではないだろうか。

これまでの「学級会は全員で話し合う」という当たり前をそう思わず、改革することが必要なのではないだろうか。

(3) 合意形成の難しさ

緑本では「出し合う」「くらべ合う」「まとめる（決める）」という 3 段階で合意形成するようになっている。筆者が授業視察をした限りでは「比べ合う」「まとめる」が上手いかわからない事例が多い。比べるといっても何をどのように比べるのか、方法をよく理解できていない場合が多いのである。上記の図 1、図 2 のような板書案のようなやり方で良いのだろうか。

第一に、緑本モデルでは、一つの案を一つの短冊に書くようになっている。短冊のメリットは、比べる際や決まった後で動かせることである。ところが、動かさないで取り組んでいる例を多く見かける。その要因は赤丸と青丸のマグネットにある。赤丸は賛成意見を、青丸は反対意見を表しており、これ自体は意見が可視化されてよい。しかし短冊を動かす際に、一緒に動かさなければならず、かなり面倒なのである。短冊だけ動かすと、後で多数意見がどれかを特定する際に不便なのである。

第二に、「くらべ合う」という名称でよいかどうか吟味が必要である。確かに「出し合う」で出てきた意見を比べて、その中から何がふさわしいのかを選んでいく作業となることは間違いない。しかしこの段階では、相互の意見を比べることもあるが、むしろ質疑応答を通して一つ一つの案の内容を吟味し妥当性を評価する意見を出し合っている場面もある。つまり、比べることも含めて分析している段階なのではないか。「くらべ合う」では本質を表していないのではないか。そこで例えば「分析する」「評価する」「妥当性を考える」といった名称にしてみるのはいかがでしょうか。

第三に、多数決は避けて合意形成すべきという考え方がある。それはそれで正しい。一方で、社会では多数決を用いて決定するのが普通である。少人数のグループでは合意形成を目指す、一定以上の人数ではそれも無理で多数決を用いる（もちろん多数決の前に少数意見を取り入れる修正案等を検討するが）。ということは、合意形成が難しい人数で、全員で話し合い、しかも多数決を用いないという、かなり高度なことをやっているのではないだろうか。実際には赤丸と青丸を見ながら、赤丸の案について「この〇〇が一番多いので決めていいですか？」と司会が聞いて決めているのだから、実質的には多数決を用いているのである。ただ、この聞き方でよいかどうか吟味が必要である。

第四に、ある学校で年に3回ほど視察をして気づいたのだが、その学級では、ある女子児童が発言すると一気に発言が続いて、その児童が赤丸を付けた案に赤丸が沢山付くのである。もちろん他の児童の良い意見を聞いて、態度を変えることはあってよい。それこそが話し合いでもある。しかし、この方法では、付度することや長いものには巻かれよということを学んでいるのではないかと疑問に思うこともあるのである。ある中学校では、全ての生徒の意見を一枚の紙にまとめて、それを見ながら話し合っていた。そういう工夫もあってよい。学級活動ノートに記載させて事前に教員は把握しているのに、それは話し合いの際にはあまり活用されないのである。自分の考えを事前に書いているのに、発言する児童とそうでない児童がいるのは、もったいない。事前に書いた児童全員の意見を反映させる方法を考えたものである。

以上のように、合意形成をする上で、緑本モデルの方式の妥当性について、赤丸・青丸の方法が妥当なのかどうか、「出し合う」「くらべ合う」「まとめる（決める）」の段階が妥当なのかどうか。今までの当たり前をいったん疑ってみて、改めて検証・考察する必要があるのではないだろうか。

(4) 事前学習の難しさ

研究授業等で学習指導案を見ると、事前学習とその指導過程もわかるようになっている。事前指導にはクラスの児童全体に対して行うものと、計画委員の児童のみを対象として行うものがある。緑本には事前の活動として、①問題の発見、②議題の選定（計画委員会）、

③議題の決定、④活動計画の作成（計画委員会）、⑤問題の意識化が挙げられている。各児童の学級活動ノートに記述させたり、教室の学級活動コーナーに記述させたりする指導もある。これらを朝の会や帰りの会、放課後の時間等を活用して行っている。なかには給食の時間や休み時間に計画委員の児童に助言指導したという指導案もあった。このような実践は妥当なのだろうか。

第一に、このような事前に多くの時間を割かなければならない教育活動を一般化できるのだろうかという疑問である。特別活動に熱心に取り組む教員にとっては、このスタイルが当たり前なのかもしれない。しかし、そうでない教員にとっては違うかもしれない。さらに言えば、そのような時間を要することが求められる学級会は極力実践せず、学級活動の内容(2)(3)に多くの時間を割いている教員がいるのではないか⁽³⁾。

第二に、最近の働き方改革の視点で言えば、このように事前に多くの準備を要する教育活動は、今後持続可能な形で実施するのは困難ではないだろうか。朝の会や帰りの会に行うのは良いとしても、休み時間や給食の時間を用いなければならないというのは適切なものとは言えない、持続可能なものとは言えないのではないだろうか。緑本に、そのような時間を活用するとは記述されているわけでないが、結果的にそのような活用をしなければできないのであれば、根本的に考え直さなければいけないのではないか。

特別活動においては、学校行事がその典型であるが、事前の指導に時間を必要とするものがある。したがって学級会も同様であると考えられるだろう。一方、学級会を一時間の授業と捉え、同じように一時間の授業の事前指導で、これだけの時間を要するものは他にあるだろうかと考えてみると、どうだろうか。多くの教材研究が必要な教科の授業もあるだろうが、一般的に児童は一緒ではない。児童と対面して行う事前指導も含めて45分の実践のために多くの時間を要する学級会の今の方法は、限界があるのではないだろうか。

となると、もはや緑本の内容の善悪というよりも、根本的に学級会はどうあるべきかを検討する必要があるのではないかと考えるが、この点は稿を改めることとし、本稿では、以上の課題を克服するための一つの例として代議制の方法を提案する。

以上の4点から緑本モデルの方法は多くの難しさがあり、全国の学校では無理をしてこれを適用しているのではないだろうか⁽⁴⁾。あくまでもモデルなのであるから、どんどん改良を加えて実践することが求められるのではないだろうか。

4. 学級会の課題を克服する具体的な方策（代議制モデルの提案）

本稿では、緑本の課題のうち、合意形成に関わる部分を改善する案として代議制の方法を提案する。

社会に出てから使うことのない30～40人全員による直接民主主義ではなく、社会に出てから一般的に活用されている間接民主主義（代議制）の方法で合意形成を行う。議会制民主主義の方法を習熟させることになり、シティズンシップ教育にもなる。

代議制による学級会は以下の要領で行う。

(3) この点については別途検証する。

(4) 敢えてこれを「緑本の呪縛」と呼ぼう。

- ①5人グループ基本で6～8グループ構成
- ②うち1グループは計画委員（会務運営係）となる（持ち回り）※これまでと同じ
- ③グループで1名の代議員（毎回交代）、協議は代議員（5～7人）が行う
- ④代議員は各グループの児童の意見を十分に尊重し意見を述べる
（時間内の最初の段階で、もしくは事前にグループ協議を行う）
- ⑤グループ内の意見が分かれて決まらなかった時は、その旨を報告してもよい
- ⑥代議員の後ろに、その代議員のグループの児童が着席する（図3）
- ⑦代議員が発言に窮してしまった時は、グループの児童による耳打ちもOKとする。また、司会の許可を得た上でグループの児童に相談を求めることができる（相談時間は1分以内）。この時間には他の代議員も同様に自分のグループの児童に相談することができる
- ⑧黒板またはホワイトボードに論点を明確に記述し、可視化して協議を行う（ただし赤丸・青丸方式は活用しない）

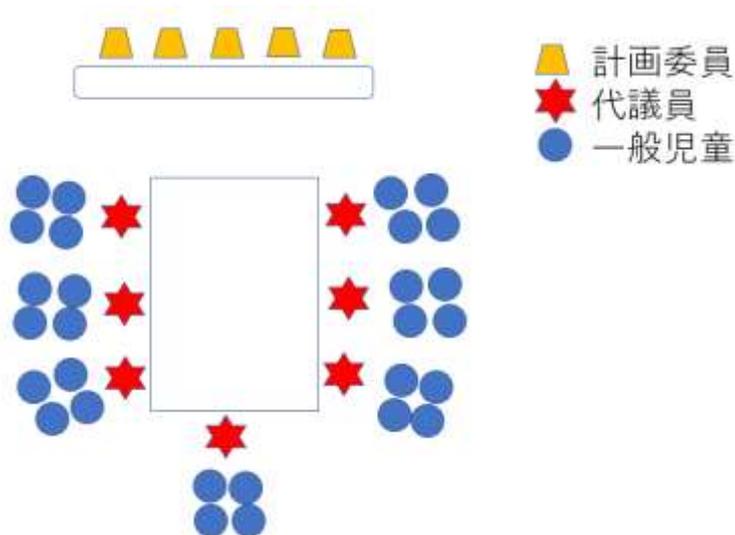


図3 代議制を用いた学級会の配置

代議制のメリットとしては、

- ・2段階の合意形成を体験できる（グループでと学級全体で）
 - ・間接民主主義を学ぶことができる（代議員の役割、市民の役割等）
 - ・学級全体の協議では意見の調整が楽
 - ・少数意見でも堂々と発言できる
- などが挙げられる。

なお、合意形成の仕方を学ばせるという視点では、

- ・できる限り多数決ではなく合意形成するように工夫する
 - ・どのように異なる意見を集約・調整して合意形成するかを考えさせる
 - ・合意形成の方法は、例えば1グループでも拒否したら決定しないなどのルールを決めておく（一方で、すり合わせ、妥協、折り合いなどの方法を教えていく）
- という工夫も必要となる。

この方法のデメリットとしては、

- ・意見が分かれてしまったグループが多数あると、話し合いが難しくなる
 - ・従来型よりも全員で話し合ったという一体感は減る
- などが考えられる。

5. 実践事例（代議制モデル）に基づく分析

この代議制による学級会を実践した学校がある。その事例を基に代議制モデルの妥当性を検証する。どちらも学級活動の内容（1）の活動である。

（1）多摩市立 A 小学校

2019年9月18日、5年生の学級（児童数25人）において担任のB教諭が実践した⁽⁵⁾。なお、代議制を活用すること以外は、全て緑本モデルの方法で学級会が行われた。議題は「オリジナルクイズ大会をしよう」であり、この日は代議制を導入して2回目だった。

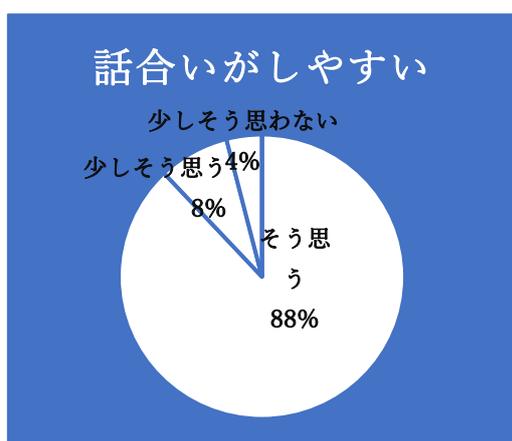


図4 話し合いがしやすいか

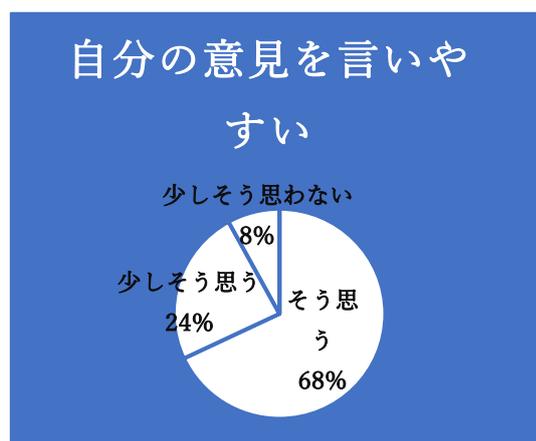


図5 自分の意見を言いやすいか

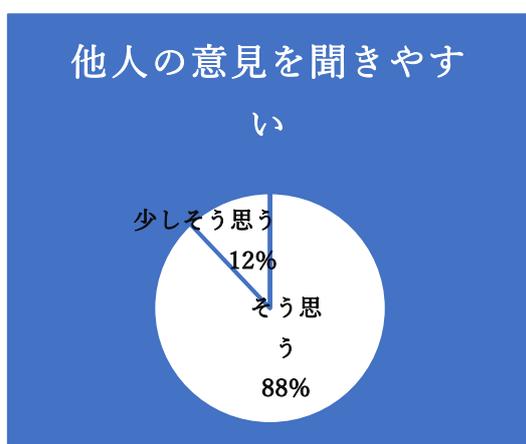


図6 他人の意見を聞きやすいか

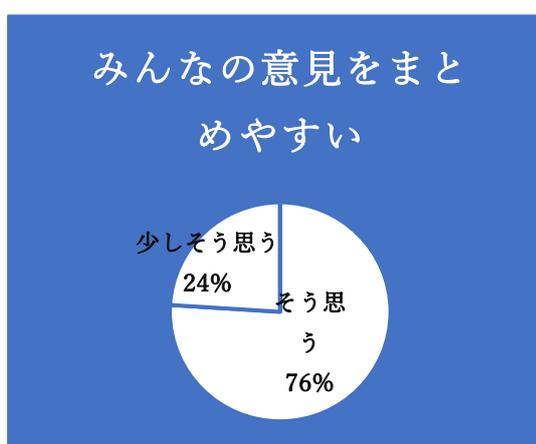


図7 みんなの意見をまとめやすいか

⁽⁵⁾ 多摩市小学校教育研究会（特別活動部会）における研究授業として実施したものである。

筆者が作成した質問紙を、学級会直後にB教諭が児童に配付し、記入してもらった結果をB教諭が回収し、結果をまとめたものが図4～図7である。この結果から代議制モデルによる方法は児童にはおおむね好評だったが、「そう思う」という回答を比較すると、「自分の意見を言いやすい」という質問項目の割合が最も低いこともわかった。

児童への質問紙調査の結果分析と、当日行われた研究協議会で出た意見をB教諭がまとめたものが表1である。

表1 代議制の成果と課題

成果	課題
<p>【児童アンケートより】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・代議制が意見を言ったり、聞いたりすることに一定の効果が見られた。 ・計画委員会や一般児童、代表者のすべての児童が合意形成のしやすさを実感している。 <p>【協議会より】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・話し合い活動の入門期に適している可能性がある。 ・普段の授業で、発言が少ない児童が発言しやすい場の工夫になりえる。 ・全体での話し合う場よりも、小さな疑問を解決しやすい。 ・リーダーシップとフォロワーシップが育つ。 ・2段階の合意形成ができる。 	<p>【児童アンケートより】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・代表者の中には、グループ内での合意形成に難しさを感じ、否定的に感じている児童が見られた。 <p>【協議会より】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ルール作りが必要。→耳打ちの許容、話し合う際、体を向かい合わせる、代表者の意見を遮らない、グループからだれが発言してもよい。 ・グループ間での話し合いの進行度合いの差が生じていた。 ・発言は順番にすべてを聞くのではなく、代表者が自由発言をする。 ・議題に向き不向きがあったり、収束する話し合いよりも拡散させる話し合いの方が向いている可能性もある。 ・グループでの事前の話し合いでは、個人の意見を貼りだしたうえで、そこから選択してグループでの話し合いをするとよい。

この結果から代議制モデルの方法は学級会の方法の一つの選択肢として活用できるのではないかと。特に入門期での活用も示唆されており、集団の状態によって有効ではないかとの指摘もあった。なお、協議会ではC小学校のD教諭が、私の担任学級では有効かもしれないと発言しており、それは通常の方法では発言する児童が固定しがちで、話し合いの方法が習熟されていないからであると述べていた（D教諭はその後、実際に実践したので、次の項で報告する）。

筆者が学級会の直後に3人の児童（代議員、司会、一般児童）に行ったインタビュー調査⁽⁶⁾では、以下のような声が聞かれた。

代議員「初めて代議員をやりました。自分の意見や他人の意見を言いやすいし、話し合う時間もあったのでやりやすいと思いました。自分が言ったことに対して、こう思うんだけど言うと、周りの子が確かにそう思うとか言ってくれてよかったです。代議員として話す時、発表する時は話しやすかったです。最後に自分たちの意見としてこうだと言えるので言いやすかったです。」

⁽⁶⁾ 当日の14時39分から約3分、B教諭およびA小学校の許可を得て実施した。児童3人の人選はB教諭に依頼しておいた。ICレコーダーに録音し逐次録を作成した。データファイルについては、研究倫理の諸規定に則して処理・管理している。

司会「司会としては、みんなの意見をまとめやすかったし、話し合いを進めやすかったからいいなと思いました。代議員は5人でした。司会としては、やりやすかったです。グループごとに意見がまとまっていて、5個の意見が出たので、それをまとめるのはまとめやすかったです。」

一般児童「意見がちゃんとまとまっていて、わかりやすかったし、司会の子がちゃんとまとめてくれたので、やりやすかったです。前は代議員でしたが、2回目の今日の方がやりやすかったです。」

司会「前回よりも話し合いの時にみんなが発言をしてくれて発言の量は増えました。だから話しやすかったです。この間よりもみんながたくさん発言してくれました。」

代議員「この前は司会だったのですが、あまり意見が出ず、自分たちから指す感じだったのですが、今日は自分もたくさん言えたと、みんなもたくさん言っていました。2回目はちょっと良くなったかなと思いました。」

この結果から、児童は代議制はやりやすいと感じていることがわかった。質問紙調査の結果とも一致している。代議員の児童は自分の意見ではなく自分たちの意見だから発言しやすかった、司会の児童は出てくる意見が5個だからまとめやすかったと、代議制の意図が奏功していることが窺える内容だった。また、グループ内の話し合いも上手く出来たことが窺える内容だった。

(2) 多摩市立C小学校

2020年1月15日、5年生の学級（児童数27人）において担任のD教諭が実践した。以下はD教諭からの報告書を基に記述する。

27人の児童を4人班3班、3人班5班に分け、各班1名を代議員とした。残りの班員と共に班ごとの意見を学級会2日前に教室横の黒板に貼りだしておいた。議題は「5年1組を盛り上げるための係活動を行おう」、提案理由は「1学期の係活動で、みんなが自分のよさを生かして楽しむことができたので、2学期はもっと楽しいクラスにしたいから」であった。

代議制で学級会を行うのは3回目、過去2回は代議員となった児童が班の中で決められた意見を、台本を読むように発言しているようなところがあった。また、自分自身の考えと友達の考えが合わず、納得しないまま班の意見を話している児童もいた。3回目となり「自分の意見と、班の他の人の意見が違ったら両方言うのもあり」と伝えたと、班での相談タイムも前回までより活発になり、意見の往来が増えた。また、代議員の児童以外の児童も、自分の意見を取り入れてくれることから、積極的に話し合いに参加する様子があった。

代議制でうまくいったことは、普段学級会で意見を言うことがない児童も、班の中での話し合いを行うことで、意見を考え発言する姿があった。また、輪番で代議員を担うことで、全体で発表する場が全員に設けられ、友達の意見をよく考え、自分の考えと比較する姿が見られるようになった。

代議制でうまくいかなかったこととしては、意見の強い児童が代議員でない場合、同じ班の代議員を無視して、自分の意見を言ってしまう場面があったことである。また、班の中で意見が合わないと、いつまでも発表できず、結果的に対極の意見を1つの班から出すことになってしまう場面があった。

この結果から、多くの児童が積極的に発言するという代議制の目的は達成できているこ

と、何回か実践することで児童が習熟し、効果的な話し合いができるようになること、代議制が効果を上げるためには、班の意見を必ず一つにまとめなければならないとせず、異なる複数の意見を発表することも認めておくことがわかった。

6. まとめ

(1) 結論

本稿は小学校の学級会のあり方を検討した。

児童、教員、シティズンシップ教育の3つの視点から、現在多く活用されている緑本モデルの課題（難しさ）を4点挙げた（時間、全員参加、合意形成、事前指導の難しさ）。

そこで、その課題解決のための一例として、代議制モデルを提案した。シティズンシップ教育の視点から間接民主主義を学ぶ方法としても機能させるモデルであることを述べた。

代議制モデルについては、事例分析から一定の成果があることがわかった。話し合い活動の習熟の度合いが低い段階、またはそのような学級で活用すると効果的ではないかという結論を得た。

(2) 研究上残された課題

代議制のさらなる検証を進める必要がある。

また、緑本モデルを用いた方法の課題は多数挙げたが、それらの全てを解決する方法を提案したわけではない。代議制は全員参加の難しさと合意形成の難しさの課題を解決する方法として提示しただけで、事前指導の難しさなどは解決していない。今後は、別の課題を解決するための複数のモデルを提案していきたい。

